

たまかwaの伝統文化

南須釜の 念仏踊り

みなみすがまのねんぶつおどり

江戸時代から

受け継がれてきた

伝統の舞

本村のほぼ中央に位置する南須釜地区。この山あいの地域に江戸時代から続く民俗芸能があります。春と夏の年2回、東福寺境内で行われる「南須釜の念仏踊り」。



東福寺境内へ

地区の伝承によると、江戸初期の慶安年間（1648～1651）、16歳以下の男女が新盆の家々をまわり、仏を供養するために踊ったのが始まりとされています。

慶安年間といえば徳川家光が将軍だった時代。その頃から代々、受け継がれてきたのかと思うと感慨深いものがありますが、その間、変遷がなかったわけではありません。明治の後半から昭和初期にかけて一時、途絶えた時期があったのです。

それを昭和27年（1952）に復活させたのが明治14年（1881）に生まれ、12歳のときから踊りに参加していた大野ケサさん（故人）です。

現在の踊りはケサさんの記憶を基に再現されたもので、その後「南須釜念仏踊り保存会」によって継承され、昭和50年（1975）には県の重要無形民俗文化財に、昭和53年（1978）には文化庁の民俗文化財に、平成19年（2007）には福島遺産百選に認定されています。



奉納する少女たちと来場者

ふるさとの 財産として

未来へつなげたい

念仏踊りが行われるのは、毎年4月3日〈春の大寺薬師祭〉と8月14日〈お盆〉の午前中。東福寺の境内において、村内の12歳までの少女たちによって奉納されます。

現在、保存会に伝わる曲目は「小夜の中山」から「下妻」まで全9曲。華やかな衣装を身にまとった少女たちが、保存会の方々が奏でる笛や鉦かね、歌に合わせて「立ち踊り」と「座踊り」を披露します。

全曲、踊り終わるのに約25分。全員が揃って踊るには日々の練習が欠かせず、保存会では月に1回、地区の集会所を利用して合同練習を行っています。

踊りを指導するのは、かつての経験者や地域の人たち。まだあどけなさが残る子どもたちに全9曲の振り付けを手取り足取り教え、一人前の踊り子として育てていきます。

そしてやっとうまく踊れるようになった頃、その子たちは卒業の時期を迎え、また新しい子どもたちに受け継がれます。この世代交代を繰り返しながら、念仏踊りは代々、ふるさとの財産として踊り継がれていきます。



踊りを奉納する少女たち

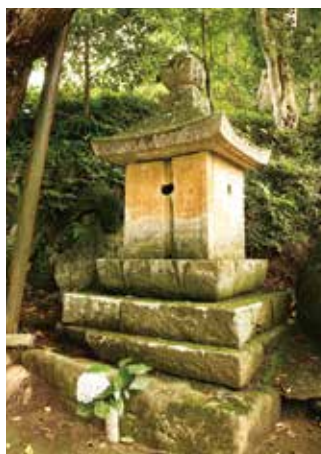
歴史の継承

たまかわの歴史

東福寺舍利石塔

【国史跡指定】

とうふくじしやりせきとう
東福寺境内（南須釜字久保宿）にある舍利石塔。元久二年（1205年）乙丑・当地の開山和尚の舍利が安置されており、鎌倉時代の弥勒浄土往生の思想を表現したものです。



江平遺跡

えだいらいせき

時を超えた天平人の記憶

―木簡―

江平遺跡は、阿武隈川右岸に位置しており、旧石器時代から中世までの遺構や遺物が多数発見されました。円墳を中心とした31基の古墳のほかに、古墳時代および奈良・平安時代の住居跡合わせて74軒、奈良・平安時代の建物跡98棟などがみつ

かっています。特に、天平十五（743）年と墨書きされた木簡が出土しており、「続日本紀」の内容を証明する貴重な資料となっています。また、木簡の出土

ます。また、木簡の出土



したすぐ近くからは、竹製の横笛もみつかったおり、年代が明確なものとでは、日本最古と思われるとても貴重なものとなっています。

木簡には、聖武天皇が最勝王経の読経を命じたことを受けて、江平遺跡周辺に居住していた人が最勝王経と大般若経をたくさん読経したという内容が記されています。

川辺宮ノ前古墳

かわべみやのまえこふん

【県指定史跡】

古墳時代後期の古墳で、墳丘はすでに原形を留めていませんが、横穴式石室の一部が残っています。

石室内部は極めて精巧な切石によって構成され、当時すでに権力者がいたことを物語っています。



宥音聖人堂

ゆうおんしょうにんどう

1575年創立の宥音聖人堂は、通称「山小屋の聖人様」といわれ、言い伝えでは「宥音」という名僧が、山頂に穴を掘り、干し柿一連を持って、穴に入り「無病息災、安産」を祈願し、鐘を鳴らし読経を続けること100日、仏様になったとのこと。

安産の守護神として近郷近在から多くの信者が参拝に訪れます。

4月の第2日曜日が祭礼日となっています。



大寺城跡

おおてらじょうあと



大寺城は、中世石川氏の拠点の城郭として石川有光が承保元年（1074年）に築城したと伝わる城跡です。築城時は土地の名前と有光の前居城名をとって藤田鴨城と呼ばれていました。文安3年（1446年）光義が城主のとき、石川町中野から東福寺を移したのにちなんで大寺城と改められ、大寺氏を名乗るようになりました。

天正17年（1589年）伊達政宗軍来攻の際には所領争いの確執などから、須賀川の二階堂氏と組んで伊達氏と結んだ石川氏に対抗しようとした。しかし、二階堂氏と共に破れ石川昭光の軍門に下ったため、戦国時代終末期まで使用された大寺城も没収されたと伝えられています。

石造五輪塔

せきぞうごりんとう

【国重要文化財指定】

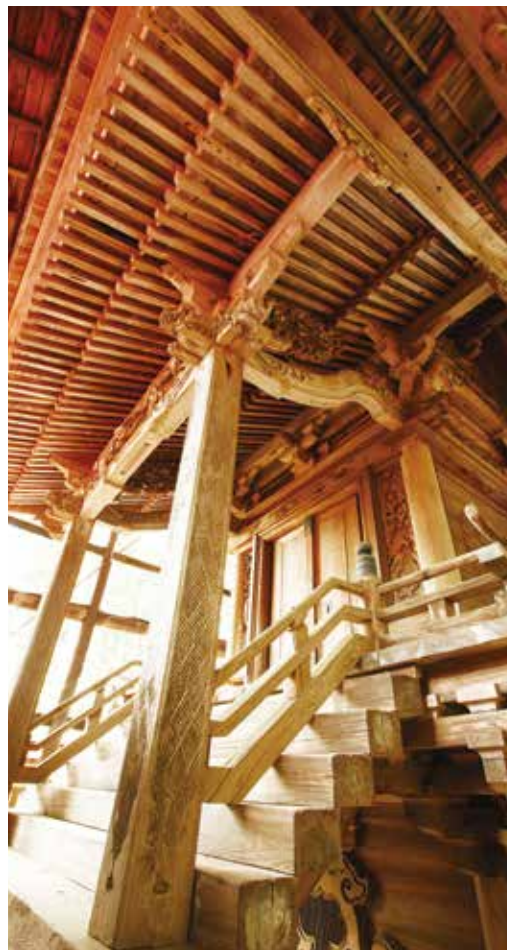
昭和13年に国の重要文化財に指定された五輪塔は、藤原時代末に領主源基光の墓として建立された石塔婆で、日本の石造工芸史上、また仏教美術史上でも非常に評価の高い貴重な財産として巖峯寺参道の覆堂に安置されています。



川辺八幡神社本殿

かわべはちまんじんじゃほんでん

【県重要文化財指定】



江戸時代初期の建造物で、平成5年（1993年）にわたり、県重要文化財として修復工事が行われた本殿は、永くこの地を治めていた石川氏の氏神として、広く信仰を集め崇められてきた由緒ある古社です。

現在は、保存のために端垣で囲まれています。屋根を支える端正で見事な桁の彫刻などは、見るものを圧巻する美しさです。主材に頑丈な栗の木を使い、建築様式は太い木割りを用いた豪壮な江戸初期の造りで、寛文・享保などの改造を経て今日に至っていることが現存する6枚の棟札から伺え、「奉

棟札正八幡宮武運長久祈慶長四巳亥十月」の棟札写しからみて、慶長年間の建立ではないかと推察されています。

また、内陣天井裏に南北朝期の貴重な古文書が秘蔵されていたり、源頼朝の大蛇退治を加護した伝説など、歴史浪漫を感じさせる話が残っています。

